

講義 1 2 : 「サルの子まれた日 : 霊長類の起源と進化」

系統発生分野 高井正成

『西遊記』の主人公である孫悟空は、東勝神州の傲来国の山頂にあった石から生まれたらしい。好き放題に暴れまくって齊天大聖などと名乗っていたが、お釈迦様に捕まって五行山の下に閉じこめられる羽目に至った。五百年後に西天までお経を取りに行く途中の三蔵法師に拾われて、ようやく解放されることとあいなったそうだ。

東勝神州などという所がどこにあるのか、今ではさっぱりわからないが、名前からして今の中国の東部辺りだろうか。そもそも『西遊記』などというものは作り話であるから真面目に探す必要もないが、サルの起源はいつ、どこだったのだろうかというのは誰もが抱く疑問だろう。

伝説の孫悟空は石から生まれたが、現実のサルの祖先は逆に化石となって残っている。現在最も古い「サルに近い化石」とされるのは、北米の白亜紀末期の地層から見つかっているプルガトリウスだ。しかしプルガトリウスは上下の歯列が見つかっているだけなので、はっきりサルであることが確認されているわけではない。初期のサルにみられる進化傾向は、手足の指の把握能力と立体視の可能な「前を向いた」両眼である。しかしこれらの特徴が完全に確立するのは、だいぶ進化段階が進んでからであり、初期の「サル」では不完全である。ましてや歯しか見つかっていないプルガトリウスがサルかどうかは、誰にもわからない。

最近発見された「サルであることが確実な化石」は、これまた北米の暁新世の地層から見つかったカルポレステスという化石だ。ほぼ全身骨格がみつかっていて、手足の把握能力と立体視の傾向がみてとれる。この他にも北米大陸からは「サルらしい化石」が多数見つかっているので、霊長類の起源地は北米大陸とされてきた。しかし近年、中国で古いサルの化石が見つかり、東アジアの方が起源地なのではないかという意見が増えつつある。いずれにせよ、サルの起源地の最有力候補は当時陸続きであった北米ー東アジア地域である。

サルたちの祖先は、地上にまだ恐竜が生息していた頃に北半球で出現し、我々ヒトの祖先となってくれたらしい。しかしサルはなぜ独自の系統を歩むに至ったのか、その背景を考えてみよう。